
夢のカケラ

百瀬華音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢のカケラ

【Nコード】

N1505A

【作者名】

百瀬華音

【あらすじ】

小さな頃の夢はまだ残っていますか？

——大人になったら何になりたい？

小さい頃は特に何も考えず、無邪気に語り合った将来の夢。その”将来”が近くなるにつれ、体は大きく、逆に夢は小さくなった。常識という枠を作ってしまったから。

小さい頃は何も知らなかった。無知と無邪気で塗りたくられた真っ白な地図を片手に、大人の世界という不毛の大地を勇み行く、無謀な勇者だった。ティッシュボックスの甲板に積み木のマスとハンカチのセイルで、何処まででも行けた。

お母さんは生まれた時からお母さんで、オタマジャクシは成長すると大きなオタマジャクシになる。お父さんよりも、家よりも、ビルよりも大きな怪獣がいる。紅葉が赤くなるのは、秋の妖精が葉っぱに色を塗っているから。ウソをつく子はおばけに食べられる。いい子にしていれば、サンタクロースがそりに乗って来て、プレゼントをくれる。

そんなことを本気で信じ、それが全てだった。

クレヨンで描かれた粗雑な地図は、いつからか海岸線がくつきりと浮かび、海にポツリポツリと開いていた穴が無くなった。

成長するにつれ、“お母さん”にも自分と同じくらいの年のころがあったと知らされるし、オタマジャクシはカエルになると教わる。映画に出てくるような怪獣なんて、大昔に滅んでしまって、今は駅前の博物館の目玉となっている。はっぱに色を塗る妖精や、子供を食べてしまうおばけなんているわけがない。サンタクロースの正体に至っては、自分の両親だ。

夢がどんどん小さくしぼんでいく。際限なく夢を吸い取って、ど

んどん大きくなる体をうらめしく感じる。私の夢の世界は、いつか消えてしまうのではないのだろうか。私が憧れたあの世界は、もう二度と現れないのだ。心の中にさえ。

そう思うと、何故か涙がこぼれそうになる。理由は、わからない。

常識のないことを言っただけにされたこともある。いるはずもない幽霊に怯えて、眠れなかった夜も数え切れない。

それなのに。夢がしぼんで、自分の中から妖精や、幽霊や、サンタクロースが消えていくことを、心の迷路の奥深く、大きな身体はどこかで怯える幼い自分がいる。

外から甲高い小学生の声が聞こえる。

——大きくなったら、りんごになるの

なんじゃ、そりゃ。とつい笑ってしまった。ばかなことを言うんじゃない、と思いつつ窓の外に目をやる。

ピカピカのランドセル。黄色い帽子。小さな体。二人の子供のシルエットが描かれた黄色いバッチが肩に光る。

（まだ一年生かな）

ピョンピョンと跳ねながら、下校していく夢を持つ子供たち。その背を目で追いつつ、私もあんな頃があったな、と改めて思う。写真やら文集やら、そういった証拠がなければ、おとぎ話の世界だと片付けてしまいそうなものだけだ。

ふとあることを思い出して、リュックの中を探る。学校でもらったプリント。これから行くであろう、未来のアンケート。

（進学希望……しかないか）

私の”将来”はどうなっているだろうか。夢に満ちあふれている、というわけにはいきそうもない。まず、そう思ってしまうあたりが。せめて、まだ残っている夢の世界が消えてなくなってしまうわないように。

そう願いながら“進学希望”に大きく丸をつけた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1505a/>

夢のカケラ

2010年12月13日19時20分発行